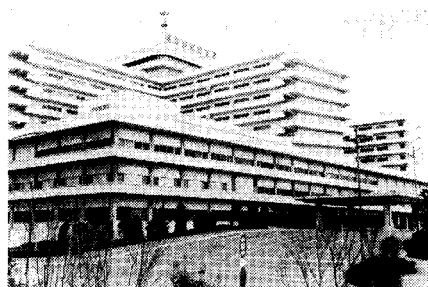


大学訪問

東 海 大 学



神奈川県平塚市、丹沢山の裾野の恵まれた自然環境の中に、東海大学のメイン・キャンパスがある。近代的な校舎と、あたりの緑が調和し、どこことなく大学の若さを感じさせる。

「21世紀にむけてものを考え、行動しうる人材の育成を！」という松前総長の高邁な方針が、研究・教育活動にどう具現化されているかが私の最大の関心事でした。

オペレーションズ・リサーチに関連する研究は、工学部・経営工学科をはじめとして、理学部・数学科および情報数理工学、政治経済学部、医学部等で進められている。

1. 医学分野でのオペレーションズ・リサーチ

かぎられた時間の訪問を通じ、垣間見てとくにユニークと思われたのは、医学分野に関連するオペレーションズ・リサーチである。

まず、栗野教授（経営工学科）を中心に進められた“人間を指向した病院システムの研究”があげられる。これは、患者の立場に立って病院のシステムを設計しようとしたものである。この研究は、やはり松前総長の「総合的な角度から医学を考える」という方針にもとづき進められたということである。

また、師岡教授（経営工学科）のところでは、病院における騒音、照明、看護婦の訓練計画等、実際の問題を手がけ、いわば病院内ワーク・システムのオペレーションズ・リサーチともいえるべき研究が実施されている。この学生は、数人ずつチームを組んで病院内に入り、現実の問題に取り組み、実践をとおして指導を受けている。

一方、医学部高橋教授のところでは、コンピュータ利用による医療情報のシステム化を進めるために、カルテの管理システムから移植臓器データ・バンクまで幅広い研究がなされている。

2. オペレーションズ・リサーチ教育

これからのオペレーションズ・リサーチの教育について、数理工学の講座を担当されている村松講師（経営工学科）は、「現実の問題を教室で教えるのはむずかしい」

とその限界を指摘された。

これに対し、「アメリカに比べ、モデル・ビルディングが遅れている」（師岡教授）という意見もある。また、1つの問題に対して解決法の代替案を出せないための失敗、すなわち自分の知っている手法に向けた問題につくってしまうために起きた失敗の例を聞いた。

いったい、大学ではオペレーションズ・リサーチの手法を主に教えたらいのだろうか、それとも、問題の定義、モデル・ビルディングといったオペレーションズ・リサーチ的センスを磨くような教育に重点を置くべきなのだろうかと逆に問われてしまった。

このようなセンスを磨くには、徒弟制度の中での技術修得のように、師のやり方を傍で見て身につける、多くの問題を経験するという修業が必要なのではないだろうか。また大学を出てしまった後で、必要が生じてから手法を学べるほどの余裕はないほうが普通であろう。

まったく私の個人的意見だが、学生たちに望むとすれば、手法とその適用の仕方をよく勉強してほしい、願わくば、応用の事例に数多く接触してほしいと思う。

3. オペレーションズ・リサーチ変化のきざし

私は10年前、エレガントなモデル、数式をあつかうことそれ自体、オペレーションズ・リサーチの勉強だと思っていた。いま、泥くさい（と当事者がよぶ）現実の問題に携わることが、一面で羨しく思われるようになってきた。現実の問題への飢えを感じる。

そのような意味で、身近な付属病院の中に問題を求めて、自らの活路を開こうとする姿勢を学びたい。

最後に、諸先生方のご協力に対し、感謝いたします。

-----松前総長の言葉-----

若き日に、汝の思想を培え
若き日に、汝の体軀を養え
若き日に、汝の智能を磨け
若き日に、汝の希望を星につなげ

（古田興司、松下技研）